



館長だより

山形県産業科学館

令和6年4月25日(木)

発行 館長 加藤智一

平衡 ②

ところで、もともとこの「平衡」とは、衡（はかりのさお）が平らでつり合っているという意味です。化学でいう可逆反応でいえば、分解反応と生成反応の反応速度が同じなので止まっているように見えるということなのですが、それはそれとして、「衡」の字で私が思い出すのは、平泉中尊寺金色堂、ミイラの話で有名なあの奥州藤原氏、藤原清衡（キヨヒラ）、藤原基衡（モトヒラ）、藤原秀衡（ヒデヒラ）、藤原泰衡（ヤスヒラ）の藤原四代。観光バスのガイドさんに聞いたところによると、「ミイラでキ・モ・ヒ・ヤス」と覚えるのだそうです。「平行」な世界観の中にある平和は、決して交わることのない状態ですので、相手と分かり合えない、完全無視の冷たくてむなしの平和です。これに対して「平衡」が保たれている平和は、お互いに押しやり引いたり駆け引きを繰り返しながら、時には失敗もあるけれど血の通った世界観です。どちらの場合でも見た目、平和は実現できるように思えますが、あなたならどちらの世界観の中で生活したいですか。



奥州藤原氏は、時の中央政府の地方支配原理に従い、国司を拒まず受け入れ、奥州第一の有力者として、源平合戦の最中も平穏の中で独自の政権と文化を確立しました。その政権の仕組みは、後の鎌倉幕府にも影響を与えたとされています。このやり方。政治手法は、仏教思想に基づいた、平らかな世の中を維持し続けようとする藤原氏の世界観そのものです。名前についた「衡」の一字が藤原氏の政治理念を表す象徴のような気がしてなりません。

館長の読書

小川糸作品「ツバキ文具店」「キラキラ共和国」「椿ノ恋文」これら鎌倉を舞台にした連作を通して、私が感じた世界観をご紹介します。いかがだと思います。タイトルは、

「キラキラ光る言葉の発見

鎌倉への誘い」

第六回（最終回）「座右の銘」

「他人のために灯りをともせば、我が前もまた明らかなるが如し（日蓮聖人）」という有名な一節。ポランテニア精神を端的に表現すると、この言葉に尽きると私は思っている。しかし、そもそも「誰かのために」と思った時点で心の負担が大きくなって、ポランテニアが「仕事」になってしまふことを私は恐れる。日蓮聖人はどんな思いで生きておられたのか。さぞかしお疲れなことだったのではないかと想像に難い。私が読書を積極的に生活の一部として取り入れた背景は、すでに述べたように通勤環境の変化による所が大きいが、今もって継続している理由は、読むことが「義務」になっていないから。「仕事」化していないからだと思う。

趣味も同じで、ただ単純に没入している時間が楽しいから続けられているのではなからうか。この没入している楽しい時間の中で、時に人生の道標となり、時に人生の糧となる教養が自然に身につくのだから、物語を生み出す小説家のみなさんは、「他人のために灯りをともす」ことができるすごい能力の持ち主なのだと思う。

一見私たちの生活に、何のつながりもないような物語の世界にも、作家によって厳選され、調べ尽くされた一語一句があり、私たちに教養というだけに侵されない知恵や知識を与えてくれる。全くもってすごいことである。

今回をもってこのシリーズは終了です。お楽しみいただけましたでしょうか。実は後日談もあり。「密かなたくらみ」を実践しました。証拠 ←

